

## 脱獄

岐阜高校 2年 金森 陽生

孤島に聳える荘厳な建造物。城を彷彿とさせるが、実はこれ、牢獄なのである。さらに、脱獄不可能な牢獄として有名で、囚人は無期懲役を言い渡された凶悪犯罪者ばかりという噂だ。そしてこの目隠しをされて連れてこられた男も、先月に強盗殺人を犯し、無期懲役を宣告された囚人である。しかもこの男、まだ若い。しばらく歩かされて、一室に入ると目隠しを外された。どうやら面談室のようだ。部屋には、立派な椅子に腰掛けた、この牢獄の長と思しき老紳士と、男を見張る看守が四人いた。老紳士は立ち上がり、

「どうだね。なかなか立派な牢獄だろう。君たち犯罪者は二度と日の光すら浴びられないものと覚悟するがいい。」と言った。

「ここは脱獄不可能な、あの牢獄なのか。」

「その通り。お前のような若者がどんな罪を犯したかは知らないが、ここに来たからにはしっかりと見張ってやるから安心しろ。」

ひとしきり面談が終わり、看守の一人が男を牢へ移動させた。

「おい、一人一室ではないのか。」

「冗談はよしてくれ。お前だって凶悪な殺人鬼なんだろう。なんとか生き抜くことだな。アドバイスとしては、目立つな、つてとこだな。」

牢の中の囚人が鋭い目でこちらを睨むのが分かった。せめてもの救いは、ぼろぼろの布切れで仕切られた個人スペースがあったことだ。

しばらくするとリーダー格の囚人がやってきて、牢の中の規則を教えてくれた。最後に、「脱獄は絶対にダメだ。なんせ連帯責任を取らされて、同じ牢のやつはどんな目に遭うかしなければならない」と険しい顔で言っていた。これは本当に二度と日の光を感じることをできないかもしれない。

就寝の合図が鳴り、自分のスペースに戻り、横になった。すると、前の壁から月光が微かに差ってきて、波の音も聞こえてくる。どうやら前の壁は比較的薄いようだ。この牢の規則に、互いのプライバシーは守るというものが含まれている。もしかするとうまくいけば、誰にも見つからずに脱獄できるかもしれない。男は、食事の時にフォークをかすめ取り、毎晩壁を削り続けた。そして何週間も経った後、遂に脱獄を果たした。

「ここはどこだろう。どうも大陸のように見える。しかし、海をどう渡ったかだけはどうしても記憶にないのだ。しかし再び日光を浴びられるとは夢心地だ。もう二度とあんなところへ戻るものか。」

男は、たどり着いた砂浜から、街の雑踏に吸い込まれていった。

男は、ボランティアの炊き出しなどで僅かだが食、べ物を得て、かろうじて生き続けていた。しかし、安定して生きていくためには、やはり職につかざるを得なくなってきた。

「不思議だ。この冊子にまとめてある全ての求人票には、身分証も不必要、年齢も不問、さらに応募すれば必ずどんな職にもつけると書いてある。これで職を得ることができただろう。それと、きつと俺は同じ牢にいた奴らに恨まれているに違いない。もう一度捕まっつてあの牢に入れられては本当に殺されるかもしれない。だから、これからは目立つことは絶対に避けねばならないな。」

男は、人目につかなそうな郊外の農家の手伝いに応募し、見事に採用された。収入は少なかったが、目立ってはおしまいの男にはどうでもいいことだった。税金は税務署に、自主的に支払う事になっている。とんでもない重税だが、脱税なんて目立つ可能性が、あることをするつもりはもっばらない。しかし、自分以外の住人に対しても、この自主性に任せる仕組みでしっかり徴税できているのが驚きだ。その後は目立たず、大人しく生活した。

男は歳を取った。今まで手伝いをしていた農家に真面目さを買われ、後を継いだ。新しく手伝いも雇った。

「変なトラブルは避けるためにどんな奴が応募してきても採用するつもりだったが、好青年が来てくれてよかった。」

収入はかなり増えたものの、税金を納めると、若かった頃と手取り金は変わらない。そして今まで通り質素な生活が続けていた。しかし、こうして自由に生活していることが何よりも大切で、幸せなのだということを、男は誰よりも理解していた。

ある惑星で会議が行われていた。ある有識者が、

「この更生プログラムは非常に有効です。凶悪犯罪者を隣のアルファ星の孤島にある牢獄に入れます。この牢は、牢獄の長から囚人に至るまで役者に演じさせています。そして犯罪者が脱獄するように仕向け、島の海辺で気絶させ大陸に運びます。すると、質素な生活に一切不満を持たず、目立ちたがらず、穏やかで揉め事を全く起こさない聖人のような人間が出来上がるのです。さらに、実質的な強制労働をさせられて、搾れる限界まで税を徴収されているのに、自分達は自由の身だと思っっているのです。手がかかるのは仮の牢獄から脱獄するまで。それ以外、つまりアルファ星のあの牢獄以外は、全て囚人によって運営されているのです。なんと素晴らしい更生っぷりでしょう。そうです。言うなればアルファ星全体が、きわめて手のかからない、『牢獄』なのです。ではこの映像をご覧下さい。」その映像には、幸せを噛み締めるようにアルファ星で生きる、あの男がいた。